

## イタリアの初等教育——歴史と現状

辻 昌 宏

大学より機会を得て、イタリアに一年半暮らすことができた。その間、僕自身も、シエーナの外国人大学（外国人がイタリア語やイタリア文化を学ぶための大学で、この種の大学はイタリアに二校ある。シエーナ大学と、もう一校はペルージャにあり、そちらの方が古くからある）とシエーナ大学（こちらは通常の国立大学で、少数の外国人留学生はいるものの、圧倒的多数はイタリア人）に通ったが、二人の子供がそれぞれ一年間、シエーナの小学校と幼稚園に通った。子供にとっては、親の都合により、言葉も判らぬ、友達も一人もおらず、日本人が一人もいない、また日本語を話す先生も子供もいない学校にほうりこまれてさぞ大変だったろうと思う。もちろん、苦勞ばかりでなく、それ以上に得難い貴重な経験をすることができたのだから、長い眼で見ればむしろありがたいことであつたかもしれないのだが、当座はともかく困難が多いであろうことは最初から予想できた。それゆえ、僕も、積極的に小学校や幼稚園の先生と話し、関わりを持つようにした。その中で、イタリア人にとって当たり前のことが、僕にとっては新鮮で、僕にとっては今まで疑いもしなかったことが、イタリア人にとっては不思議に思えてしかたがないという事例にいくつもでくわした。

幸か不幸か、日本にはイタリアの学校を紹介した適当な書物がほとんど見当たらない（註1）。ヨーロッパの学校を紹介したものも、イギリス、フランス、ドイツが中心でイタリアは「おまけ」程度に言及されている場合が多い。

そこで、イタリアの小学校と幼稚園の実際を、特に小学校を中心にできるだけ具体的に紹介し、ここにあらわれた教育観・人間観を抽出することを試みてみたい。そしてそれを歴史的なパースペクティヴの中に位置づけることで、現在のイタリアの教育システムのよって来たる所と、その必然性を明らかにし、日本における初等教育の混迷状況を抜け出す方策を見出すためのささやかなヒントとなることを願っている。あらかじめお断りしておかねばならぬが、僕が実際に見聞したのは、シエーナの一小学校、一幼稚園であつて、それがイタリア全体に当てはまることであるか、どうかは判らない。とかく画一的といわれる日本の学校ですら、自分の通った学校を、同世代の他地域の学校に通った知人に尋ねると、細かなところでは、食い違いがあり驚くことがある。いわんや、イタリアにおいてをや。というわけで、イタリアのこれこれの町では、この点はシエーナと違うということもあろうと思うので、お知らせいただければ、大変幸いです。

\*

### 1. イタリアの学校の歴史

個別の学校の細部の説明に入る前に、ごく大雑把ながら、イタリアの学校・教育の歴史をかいつまんで振り返ってみよう。

拙論では、その出発点を反宗教改革の時代にとる。それはその時代が、イタリアが他のアルプス以北の国々と進路をたがえた分岐点であると考えからだし、良かれ悪しかれイタリアの特徴を形成する契機となった時期と思われるからだ。もちろん、イタリアでの教育が反宗教改革の時代に始まったのではない。ローマ時代にも、ローマ市民には教育がほどこされていたのだし、ずっと時代を下って、中世のフィレンツェの年代記作者ジョヴァンニ・ヴィッラーニも1338年のフィレン

ツェでの教育について次のような証言を残している。

8千から1万の少年、少女が、字を読める。6つの学校で、算盤やアルゴリズム（アラビア数字を用いた算術をこう称した——筆者註）を学んでいる少年の数は、1万から1万2千。4つの大きな学校で、文法や論理学を学んでいるものは550から600（註2）。

ここでは、ヴィッラーニの提示している数字の信頼性はともかく、大学に入る前の段階で、いくつかの種類の学校があり、それぞれの需要に応じて習うコースが異なっていたことを確認するととどめておこう。

さて1517年ルターの質問状にはじまった宗教改革とそれに対するカトリック教会の巻き返し、反宗教改革は、ヨーロッパを二分する大きな運動であった。カトリックのお膝元イタリアでは、反宗教改革の時代に、教会が、とりわけイエズス会が教育の分野に力を入れるようになるが、まずイニシアティブをとったのはプロテスタント側であった。プロテスタントが教育に力をいれたのは決して偶然ではない。むしろ必然的なことであった。

プロテスタントにとって、「腐敗した」教会組織を通じてではなくて、聖書と直接的に信者が向き合うということが、決定的に新しい宗教的な経験であった。そのためには、信者が字を読めることが必要不可欠である。こうして、字が読めることが魂の救済の必要条件となり、同時に、カトリック教会の軛（くびき）から解放される条件ともなったのだ。しかし聖書が広く読まれるためには、これまでのようにラテン語のウルガータ聖書のみを聖書のテキストとして唯一のものとするのではなく、聖書が各国語に翻訳されねばならない。そうでなくては、聖書と直接向き合うということは、知識層の特権となってしまうからだ。それゆえルターは、ドイツ語訳聖書をつくることに精力を注いだわけだ。

こうしてプロテスタンティズムから二つの結果が生まれた。1. 宗教的経験の個人化。即ち、聖書の解釈を教会が公式見解で統一し、それを聖職者を通じて、世俗の信者に伝えるというシステムの否定。2. 俗語が正統な言語として認められ、それとともに、民族的な統一に対する意識が芽生えた（註3）。

こういったプロテスタンティズムが深く浸透したのは、スコットランド、スウェーデン、そしてニュー・イングランドであった。イングランド、プロシャがこれに次ぐ。たとえば、17世紀半ばのニュー・イングランドにおける男性入植者の識字率は約60%で、母国イングランドの40%を上回っていたのである。祖国を離れたものは主として識字化された地域・階層からやって来ていたわけである。読み書きが出来るということが、ある種の自信を与え、それが移民という大きな決断を下す力となっていることを窺わせるデータである。

読み書きの教育は、宗教的な対立が契機となって進展したかもしれないが、それはやがて当初の意図を越えた方向へ進む。即ち、経済的な動機と結びついていくのである。労働の分業化、生産物の売り込み、取引の法的保護といった問題は、読み書きに関わってくる。こうして、18世紀の半ばには、読み書きを学ぶ動機として、経済的な要因が、宗教的な要因を上回るようになっていく（註4）。

さてここで話を、反宗教改革時代のイタリアに戻そう。この時代、イタリア半島の分裂した諸国家では、教育に対してはばらばらな対応がなされていたが、国家の壁を越えて統一的なカリキュラムを提供したのは、イエズス会系の学校だった。それゆえ、その文法・修辞学のカリキュラムや教育法は、イエズス会が直接関与していない学校においても採用されたのである。イエズス会は、ヨーロッパ中に学校を設立し、貴族の子弟やブルジョアの子弟の教育にあたった。1640年までに500以上の大学を設立したのである。彼らは Ratio Studiorum という学校と寄宿学校 (convitto) のた

めの規則集を設けて、それにもとづいて学校の運営にあたったが、それは古典的なカトリック精神に基づいたもので、以後約二世紀にわたってヨーロッパの支配階級の文化およびメンタリティを形成したのである。

このイエズス会の学校運営規則集、*Ratio Studiorum* はどんな内容であったか。ざっとかいつまんでみておこう。以下の内容は、大意であることをお断りしておく。

第一条 学問は天賦の才知を神学へとむかわせるため、また神学を究めて、神の栄光をたたえるためのものである

第二条 重要な点では、アリストテレスから離れぬこと

第三条 キリスト教に役立たぬようなアリストテレスの解釈者の説は、よほど用心してでなければ、説明したり、引用したりせぬこと

第四条 それゆえアヴェロエス（それに似た者についても同様だが）のような逸脱した説を引かぬこと

第六条 反対に、聖トマス（アキナス）についてはつねに敬意を持って語ること。彼の説に従うべきときは、熱心にしたが、彼の説から逸脱する際には、敬意を持って、しぶしぶながらでなければならない

第四十六条 生徒の中の一人と、他のものとより、親しくしてはならない。学校の時間以外には、生徒とは手短かにしか話してはならない。真面目なことについて、開けた場所で、つまり、学校の中ではなくて、校門や、中庭や、校舎の入口などで話し、生徒の教化に最大限の意を用いるように（註5）

といった具合で、かなり細かい。何が「正統」で何が「異端」か、といった枠組みをがっちり固めたうえで、現場教師の裁量部分も与えている。巧みなイデオロギー操作術と言えようか。こういった戦略も、イエズス会誕生の背景が宗教改革に対する対抗運動だということを思いあわせると納得がいく。こうした規則集が、日本の学習指導要領の遠いご先祖なのだろうか。

ついで、ヴィットリオ・アメデーオ2世による改革が来る（1729年）。彼が生きた18世紀は啓蒙主義の時代、改革の時代であった。ヴィットリオ・アメデーオ2世がしたことは、簡単に言えば、教会、特にイエズス会系の学校の特権を制限し、世俗の学校を積極的に開校したということだ。アメデーオの改革は他の君主の先例となったこと言うまでもない。学校が国家を支える役人や専門家を養成する場所として注目されるようになってくると、他の啓蒙専制君主たちも、その発展に力を入れるようになる。こうしてフランス革命の余波でフランスに支配された3年間（1797～1799）も含め、王政復古からリソルジメントにかけて着々と学校が整っていく。つまり、支配階級が、支配体制にとって、学校は有意義であることを認識して、教会にばかり任せてはおけないと考えるようになったのだ。

19世紀前半は、イタリア教育に様々な改革がもたらされた時期であった。イギリスやフランス、ドイツの教育思潮が流入し、大いに論じられ、それが実際に教育機構に取り入れられたのである。

さて、時代は移り、ようやくイタリアという国家が成立する。イタリアの統一が遂げられんと見て取るや、トリノの政治家マッシモ・ダゼリオは有名なセリフ「イタリアは出来た、さあ、イタリア人を作らねば。」と言ったという。これはイタリア人は、自分の町に対する愛郷心および帰属意識が強いため、ミラーノならミラネーゼ（ミラーノ人）、フィレンツェならフィオレンティーノ（フィレンツェ人）、シエーナならセネーゼ（シエーナ人）という意識が先に立って、イタリア人という自覚が薄いことを踏まえての発言であり、現在でも、北部同盟の北イタリア独立要求を論じるに際などに、イタリア人（あるいはイタリア人であるという意識・自覚）は形成されたのかどうか問題

とされ議論される場所である。また、日刊紙コリエーレ・デッラ・セーラに見る世論調査でも、「あなたは、自分を何と感じるか？」という設問に選択肢として「イタリア人」「自分の生まれ育った都市の住民」「ヨーロッパ人」などというものが並列されていて、決して「イタリア人」という解答が飛び抜けて多いということはないのである。

ところで、リソルジメントの時期、教育はどうなっていたのだろうか？イタリアで最初にできた近代的な学校法制は、ボンコンパーニ法（1848年）である。これは、イタリアの統一前に、サルデーニャ王国で制定されたものだ。ボンコンパーニは王国の立憲政府の文部大臣であるが、彼は、当時唱えられていた「自由な」教育の信奉者であった。「自由な」というのは、教会の影響を受けぬという意味で、カヴールの信条「自由な国家における自由な教会」から来ている。ボンコンパーニは、それより前の1839年に、幼稚園設立のための委員会のメンバーにもなっているし、教師としての経験も積んでいた。政治的にはカヴール主義者で、その信念を教育に適応し、教会・修道院に賦与されていた特権を剥奪し、学校に対する宗教界の影響を排除したのである（註6）。ボンコンパーニ法の制定された1848年は、ヨーロッパ全体に革命の激震が走った年であり、イタリア各地でも革命運動が起こり、憲法が發布され、議会が制定され、オーストリア軍に対する独立戦争も始まるのであるが、結局オーストリア軍の巻き返しに破れ、イタリア半島の諸国は専制体制に戻ってしまう。立憲君主制が保たれたのは、ピエモンテのサルデーニャ王国のみであった。この後、サルデーニャ王国は、統一前のイタリアの諸国のうちで、教育面においても、最も先進的な地域になるのである。

ボンコンパーニ法の自由主義的な方針は、1859年に制定されたカザーティ法にもおおむね受け継がれた。その二年後の1861年に統一になったイタリアで、教育の基本法として長らくカザーティ法は重要な役割を果たすことになる。この法がジョヴァンニ・ジェンティーレの改革（1923年）まで、イタリアの教育の基本法であった。

イタリア教育の俯瞰図として大転換点をあげれば、最初がこのカザーティ法（1859年）、次がジェンティーレ改革（1923年）、そして次が現在のベルリγγελ改革（1997年～）ということになろう。あとで詳しく触れるつもりだが、現在進行中の改革は、ジェンティーレ改革以来の半世紀振りの、21世紀に向けた大改革という鳴物いりのものなのである。

1859年11月13日に公布されたカザーティ法は、時の文部大臣にちなんだ名であるが、カザーティ自身はボンコンパーニとは異なり、もともと教育家ではなかった。法案の作成に関わった人物としては、ボンコンパーニ法の時から関与していたアンジェロ・ファーヴァ、師範学校の校長であり、教会と国家の分離を主張していたドメニコ・ベルティなどがいた。カザーティ法にあらわれた主要原則は、Minio-Paluello によれば次の通り（註7）。（1）中央政府およびその監督下にある地方自治体が、教育に責任を持つ。（2）少なくとも「読み書き算盤」は、できるだけ広範囲の国民に教えなければならない。（3）中等教育・高等教育は、主として、社会が必要とする様々な職種につく市民を育成するためのものである。（4）古典教育や文学教育は、高度な専門職にとつての文化的な基盤であるが、科学、地理、外国語も、旧来の狭い知的地平を拡張するものである。（5）宗教は学校から排除されるべきものではないが、教育の基盤ではない。中等教育では、その存在が容認されるに過ぎない。指導的精神とでも言うべきものが求められるとすれば、国家こそが、真の指導的精神である。

以上がカザーティ法を貫く精神で、明らかに国家主導的である。他国に較べて「遅れた」状態を、国家の強力な推進により先進国に追いつこうという意図が見て取れる。実際、イタリアやスペイン、ポルトガルといった南欧の国々の文盲率は80パーセントにも上っており、他のヨーロッパ諸国よりずっと高かった（ただし統一前のイタリアでは、地方により、というより国によりと言った方がよいが、大いにその率は異なるし、男女差も大きかった）。19世紀半ば当時、例えば、スウェーデ

ンの文盲率は10パーセントを切っていたし、プロシャやスコットランドの文盲率が20パーセント弱、イングランド、ウェールズが約30パーセント、ベルギー、フランス、オーストリア帝国は40～50パーセントといった具合だ(註8)。であるから、イタリアは国家として文盲一掃に取り組み、初等教育を無償にし、成人のための夜間学校を開いて、文盲率を低めようとしたのである。

ただし、初等教育の普及に意欲的だったカザーティ法にも小学校以前の幼児教育についての規定はない。地方の諸団体や個人にゆだねられたままだったのである。小学校は6歳から始まった(今でもそうである。ただし日本とは異なり、学校の暦に合わせるのではなくて、1月1日生まれから12月31日生まれまでの子供が一学年を構成している)が、初等科と上等科に別れていた。それぞれ2年。つまり小学校は4年であった(現在は5年)。そして画期的だったことに、前述の如く、西欧ではじめて初等教育が無償であった。費用は、コムーネ(地方自治体)が負担したのである。各コムーネは学齢期(6歳から11歳)の子供が50人以上いる場合には、少なくとも一つの男子初等科と一つの女子初等科を設立しなければならなかった。コムーネが経済的に貧しかったり、人口が少ない場合には、近隣のコムーネが共同で学校を設立することも認められていた。上等科も男女別学で、4,000人以上の人口があるところや上級学校のあるところには設置が義務づけられた。1877年のコッピノ法により、小学校の最初の2年間で義務教育化された(註9)。小学校後半の2年は、家庭の(経済的)事情により免除が認められた。また、財政困難な自治体の場合、学校設置義務が放置される場合もあった。そのため1907年の時点においても、義務教育を受けるべき児童で、未就学の者が100万人以上にのぼった。つまり、学校を設置する能力を欠いた自治体が多数あることが判明したのだ。この事態に対処すべく1911年のクレダーロ法で、大多数の市町村で、初等学校が国家に移管される。

この間教員の組織などにより、改革の必要性が訴えられていたが、第一次大戦後も、改革はすぐには実行されなかった。1919年から1922年の間に文部大臣はA. バチェッリ、A. トッレ、ベネデット・クローチェ、M.O. コルビーノそしてA. アニーレと次々に代わっていった。しかしその慌ただしさの中で、バチェッリはシラバスの改革に着手した。シラバスの内容そのものは大して変更しなかったものの、教える「精神」として、細部の事実を覚えさせるのが重要なのではなく、個々の生徒の能力を刺激し、知的発展をうながすのが肝要と主張した。哲学者・歴史家・文学史家として名高いベネデット・クローチェは、文部大臣の任にあたり、中等教育のシラバスは自由にして、卒業の際に国家試験を課し、その国家試験のシラバスを規定すればよいとした。こうした過程を通じて、本格的改革の機は熟しつつあった。

ジェンティーレ改革は、ムッソリーニ自身が「最もファシスト的改革である」と言っているのだが、それは何故か。結局、ジェンティーレ改革が実施されるのは1923年であるが、この時点で、ファシストによる改革といってちゃんとした体をなしているものがこれしかなかったということに尽きるようだ。実際には、それまでのファシストの大会で、教育が議題にのぼって討議されたことはなかったし、ムッソリーニの母親が教師で、ムッソリーニ自身もごく短期間教師をしていたというものの、教育問題について弁舌をふるっていたわけではないのだ。

ジェンティーレ改革で最も力が入れられたのは、中等教育であるが、小学校はどう変わったのであろうか。まず、それまでは小学校の下級・上級あわせて4年だったものが、5年になったこと、つまり下級が3年間になった。進学するものにとっては、その年齢が、10歳から11歳に上がったことになる。

さらに重要なことは、カリキュラムが自由になったことで、何をどう教えるかは、教師の裁量に任された。ただし、卒業時に国家試験があり、そこで何を出すかということが枠組みとして小学校の教育内容を事実上規定することになった。もう一つ重要なことは、宗教教育が正式に取り入れられたことである。リソルジメント以来、ヴァティカンが国家としてイタリアを承認していなかった

し、イタリアもヴァチカンを国家として認めぬという対立状態の中で、公立学校ではこれまで、世俗的（非宗教的）教育がなされてきたのだ。では、改革後の宗教教育の中身はどんなものであったのだろうか。下級の三年間に宗教の時間で教えられるようになったのは、基本的なお祈り、キリスト教の基本的な教義、福音書および旧約聖書からの簡潔なお話、主の祈りの説明などである。上級の二年間（四年生、五年生）では、学校の所在地にちなんだ聖人の伝説に重点をおいた宗教の歴史、十戒や福音書の寓話にもとづいたカトリック道徳や教義、秘蹟やカトリックの儀式のいくつかの細部。

ちなみに、我が家のナツオが小学三年生としてシエーナの小学校に滞在した時には、入学前に宗教の時間をとるかどうかを親が問われたが（というのは、現在、宗教の時間は必修ではなく、選択で、宗教を取らない場合、その時間に何をするか、他の科目の勉強をさせるか、自由に過ごさせるかなど、いくつかの選択肢が提供されており、我々もその選択肢から選ぶ書式に記入させられた）、ナツオの場合、宗教の時間を取らせることにした。宗教の時間を受けない生徒も数人いるということが、後にわかった。3年生では、主として、旧約聖書のエピソードを子供に分かるように説明してあるものを学んだ。4年生になると、新約聖書のエピソードを扱うとのことであった。日本ではほとんど聖書やその内容に触れたことのない息子にとって、旧約の神は非常に厳しく、ほとんど不条理な存在と信じられたようであったが、後にイタリア人にそのことを語ると、旧約の神はたしかに難しい存在だとの話で、やっぱりそうかと、妙な具合に僕も安心したのだった。

話をジェンティーレ改革に戻そう。ジェンティーレ自身は観念論哲学者で、宗教を越えたところに、人間の自己実現を考えていたのだが、小学校においては、哲学の代用として宗教を教えることを認めたのである。彼の哲学によると、人間の課題は、その普遍的本質を実現し、個人の限界を越えることにある。この普遍的な価値というものが、国民や国家という概念と同一視されたときに、ファシズムの国家重視と結びつくのである（註10）。

\*

さて、第二次大戦後、戦争の終結の仕方の相違にも原因があるのであろうが、日本とイタリアの学校制度の変革の仕方は、全く異なっていた。日本の場合は、一言でいえば、ヨーロッパを範とした旧制から、アメリカをモデルとした新制への改革で、6・3・3制が定められ、とくに高等教育が大衆化への道をすすむことになる。一方イタリアは、学校制度としては、ほとんど変化がない。旧制のままなのである。これは、そもそも、アメリカが派遣した教育改革小委員会の人数が、イタリアに対してと、日本やドイツに対してとでは、違いがあるためである。イタリアの場合、1944年のピーク時においても18人であったのに比べ、ドイツでは1947年には40人にのぼるし、日本では約63人のアメリカ人と日本人専門家が1947年に、任命されている（註11）。しかも、イタリアの場合、連合国が上陸してから、ドイツ軍がイタリア全土から撤退するまでに約20ヵ月も要したため、最初はアメリカの派遣した委員の影響力は地域的にも限られたものであったのだ。即ち、米軍の上陸はシチリアそして南イタリアから始まったのであるが、同時期に北イタリアは対独レジスタンス（その参加者がパルティジャーニ）の最中であり、パルティジャーニによって独自の教育改革が試みられていたのである。が、アメリカはそういった教育が革命へと結びつくことを恐れ、抑圧しにかかったのである。

その後、1948年の新憲法とともに、国民のすべてに、教育を受ける権利が制定される（3条、4条および33条、34条）。

そして、1962年には、中学校の改革がなされる。それまでは、小学校を卒業したあと、上級学校へいく人用の（旧制）中学と職業学校系の学校があった。それを、すべての人を統一的にあつかう（新制）中学校をつくったのである。あたらしき出来た中学を旧制のものと区別して「統一中

学校 *scuola media unica*」と呼んだが、現在では、中学校は一種類しかない状態になれてしまったので単に「中学」と呼ぶ。この改革の背景には、経済復興にともなって中等教育の大衆化が進んでおり、それを制度的に追認したという面が強い。カリキュラムの点では、ラテン語教育を必修からはずし、自然科学教育の強化がなされたものの、根本的な制度はそのままであった。

その後、1969年、*Maturità* と呼ばれる試験が実験的に導入された。実験的なもののはずが、その後30年間そのまま踏襲されてしまったわけである。*Maturità* というのは、高校卒業試験にあたるもので、高校の種類によって *maturità classica*, *maturità scientifica*, *maturità linguistica* (以上の三つは、リチェオ、即ち日本の普通科高校に相当する学校で学んだものがうける) そして、*maturità artistica*, *maturità magistrale*, *maturità tecnica* (以上は、職業系・芸術系高校の生徒がうける) がある。試験には筆記と口頭試問と両方ある。この試験に受ければ、原則として大学に進学できる点は、フランスのバカロレアに似ている。ただし *maturità* の改訂についても、大学の学部・学科ごとの入学者数制限についても現在のベルリングエル改革で検討中であり、これから制度が変わっていく可能性が大いにある。

さらに1977年の改革では、小学校と中学校で、伝統的な数字で成績をつける制度を、生徒の学習の進行状況を記述するシステムに変えている。ただし、1996年現在の通信簿は、上記の二つを組み合わせたもので、各教科ごとに総合的な記述による評価と、いくつかの項目をたてて、AからDの評価を与えている。

## 2. ベルリングエル改革

ジェンティーレ改革以来の大きな改革は、ただいま現在進行中である。1996年の選挙で、ウリーヴォ（オリーブの木の意、左翼民主党を中心とした中道から左派にかけての勢力を結集したグループ）が政権を奪取し、ブローディ新政権が誕生した。新政権の文部大臣はベルリングエルで、彼は元シエーナ大学学長であった。そのベルリングエルのもとで法案は出来上がっているが、現在この法案はまだ法案であって、国会の議決をみていないので、いつから実現されるかは定かでないし、国会での議論の中で部分的に修正されることもありえるだろう。実際、98年7月に、法案修正の動きがあった。それは、最初の法案では、これまで8年だった義務教育の年限を10年に引き上げようということであったが、それを9年にするというものである。これまで8年間だったものを、一気に10年にするのは無理があるということで、とりあえず1999年からは9年にして施行しようというわけだ。1999年度に実現したのは、要するに、中学校を出てからもう一年高校に行くことを義務にしたのである。しかし、99年にはさらに大胆な改革案が出された。それは即ち、小学校（従来の小学校と区別し *primo ciclo* と呼んでいる）を7年とし、中高校（*secondo ciclo*）を5年間とし、その最初の2年を義務教育とする。つまり7+2の9年間があらたな義務教育期間で、小学・中学・高校を二つのサイクルに再編すること。またそれにより、従来より大学入学が一年早まるというものだ（註12）。これとても、これで最終的決着をみたのかどうかは定かでなく、ベルリングエル改革は現在進行形というしかない。（本稿校正中の2000年2月上旬にこの案はイタリアの国会を通過したことを付記しておく。）

改革の骨子を見る前に、そもそも、このような改革案が提出される背景を述べておこう。一つには、ジェンティーレ改革以来、70年以上たって、社会・経済構造の変化に学校制度が対応しきれなくなっていること。また一つには、EU諸国との制度的なすり合わせということ。EU諸国は、通貨統合だけでなく、それにともなって、税制面でも、たとえば消費税（付加価値税）を調整し、大きな隔たりをなくしていこうという動きがあるし、大学レベルではエラスムスと呼ばれる留学制度があって、EU諸国の学生は、自分の国以外の大学で取得した単位が、本国に帰ってから卒業単位のなかに認められるのである。

さて、大学入学以前の段階では、EU諸国とイタリアの違いは何であるか。それは、イタリアに見られるような小・中・高（実は、日本の高校に相当する段階がイタリアでは多岐にわたっているので *secondaria superiore* 上級学校などとよばれる一註13）という3段階にわかれるところはほとんどなく、小学校のあと、上級の学校になる国が多い。また、多くの国では、16歳まで義務教育で、ベルギー、オランダ、ドイツでは18歳までが義務教育である。こうした他のEU諸国とのずれを解消するという一面を現在の改革は持っていることは、いなめないであろう（註14）。

ベルリングエル改革の最終的な形がどのようなものになるかは、これからの進展を見るしかないわけで、ここではとりあえず最初に出された法案の骨子を表にしたものを見ておこう。

今回の改革の狙いの一つは、他のEU諸国に合わせて、義務教育の年限を延ばすこと。現行の8年を10年にする予定だが、前述のように、暫定的には9年間で実行するということになるかもしれない（前述の如く、1999年度は、9年間として実施）。第二に、中学校の3年を、独立したものとして捉えるのではなくて、その後の学校（リチェオ等）の前半の3年間と合わせて6年間で一つのサイクルとして捉えなおすこと。これは何を意味するかと言うと、一つは中学校と高校のカリキュラムの重複を避けられるようになるということであり、もう一つには今までの中学校は、どの生徒に対しても同じカリキュラム（多少の選択科目はあるものの）を与えていたわけだが、これからは、資質の違いによって変えていく可能性を持つということである。中学卒業の段階で、大学進学コースであるリチェオに行くものもあれば、職業系学校に進む生徒もいるので、そのカリキュラムの違いを、中学段階にまで反映させる可能性もあるようだ。つまり中学の段階で（特に三年次において）、進路をある程度選ばせるということになる。ただし、いったん選んだコース（学校）は、変更可能だとしている。

下の図は、ベルリングエル改革の最初の法案の骨子を図示したものであるが、あくまでも法案であり、この通りに実現するとはかぎらない。現に、修正案が提出されているわけだが、それとても決定的とはいいがたいので、ここでは最初の案を示しておく。

現 在	将 来
	一年（幼稚園の最終年）
小学校 六歳から5年間	小学校 6年間（第一サイクル）
中学校 3年間	6年間の第二サイクル （1）前半の3年は義務 （2）後半の3年は任意
上級学校（リチェオ等） 5年間	
小・中の8年間の義務教育	計10年の義務教育

### 3. 現在（1995～6年）のイタリアの小学校

前述のように、僕が見聞したのは、あくまで、イタリアのシエーナという一都市の一小学校に過ぎないが、そこに如実にイタリア文化が反映されていると思うところが多々あったので、是非、紹



介したいと考えるに至った。筆者の思い込みで、他の都市の他の小学校では、事情が違うということがあれば、ご教示くだされば幸いです。

さて、思い返すと、イタリアの小学校は、9月に始まり、我が子ナツオも新学期とともに学校に通い始めることになった。ところが、4月に僕が問い合わせたところ、9月何日から学校が始まるか、決まってないという。聞けば、毎年、いつ学校が始まって、いつ終わるか、決まってないというのだ。これには驚いた。しかも、後に知ったことだが、州によって、始まりや終りの日が微妙に異なっているのだ。しかし、おおよそのところ言えば、9月初旬か中旬に始まって、翌年の6月の初旬か中旬に終わる。つまり、まるまる3か月夏休みがある。

さて、ナツオは7月末からイタリアに来て、少し足ならしをしたのであるが、いよいよ登校日が近づくに連れて、不安気である。無理もない。イタリア語も挨拶しかしゃべれず、先生も全然日本語が分からない人ばかり、まわりに日本人ゼロのところへ行くのだ。初日は、親子とも、緊張の極みであった。学校の校門というと、日本では、校庭に面していて、ややしばらく歩いて、校舎の入口、げた箱がある、という感じだが、シエーナの小学校は、道に面していきなり建物があり、大きなドアがあって、そこに守衛さん（男も女もいて、ブルーの上っ張りを着ているからすぐ分かる。先生は平服。）がいる。登校は、皆、親がついてくる。中には、祖父母が送りにくる子もいるが、一人で登校してはいけないのである。下校時も同じ。これは、なかなか面倒な時もあったが、下校時には、校舎の戸口に先生が立って見送るので、何か連絡事項や質問がある時は、すぐに気軽に話ができ便利でもあった。ただし病欠などの正式な連絡は *diario* という連絡帳に相当するものを用いて行っていた。

親は戸口の前で、子供と別れるのだが、初日は僕も事情を話して中へ入れてもらう。建物は、とにかく天井が高い。5～6メートルはある。もっとも個人用住宅でも、バラッツォと呼ばれる、しっかりした建物の天井はそのくらいあるし、普通の家でも3メートルくらいあるものは珍しくなかった。教室に入って、先生にあう。初めに、先生がナツオを他の生徒に紹介してくれる。先生は三人いる。いや、四人いる。イタリアでは10年ほど前から、小学校3年から英語を習うことになったので、1年生や2年生の時には、担任は3人なのだけれど、3年生から4人目の先生が加わるわけだ。4人目の先生は英語だけを教えている。3人の分担はこうだ。一人は、国語や音楽、図画。一人は、算数、理科。一人は歴史や地理。つまり、上の学校へ行けば、人文科学、自然科学、社会科学と将来なるものを基準に別れているのである（註15）。初日の授業でまず驚いたのは、授業が二時間続けて行われること。時間割を見ると、午前中は4時間なのだが、二時間ずつで区切り、午前中は原則として二科目しかない。しかも、一時間ごとに休み時間を取らず、二時間通してやってしまう。だから、子供はトイレに行きたくなると「マエストラ（先生）！トイレに行ってもいいですか？」というわけで、授業中にばらばらとトイレに出入りがある。最初の二時間が終わると、休み時間であるが、そこで皆、おやつを取り出して食べる。

しまった。前にどこかで、そのことは読んだのに！ナツオは何も持っていない。すると、隣のフェデリーコという子がパニーニ（ハンバーガー用のパンにハムなどがはさんである一種のサンドイッチ）を半分にしてナツオに差し出すではないか。先生に言われたわけでもない。回りのものに言われるでもなく、まったく、当然のように、自然な振る舞いで、僕はいたく感動した。この例に見られるような、自発性は、日本の子供達と較べた時、イタリアの子供たちの大きな特徴の一つである。おそらく、イタリア人自身はそれが、彼らにとっては当たり前のことなので、特徴とすら意識していないだろう。この自発性のよってきたところは何であろう。断定的なことは言えぬが、次のように考えてみた。昔はいざしらず、少なくとも現在のイタリアでは、子供が大変に可愛がられている。甘やかされていると言っても過言ではない。それは世界一進んだ少子化とも深い関係があるであろう。子供たちは、僕の見限りの、危険なことをしなければ、何をしても怒られない。大人がしゃ

べっている時でもわーわー騒いでいるのは当たり前。それに負けずに大人の声が大きいので、こちらにも日本にいたときの1.5倍ぐらいの声を張り上げてしゃべるようになる。そうやって、のびのびと育った子供たちには、感情面での抑圧が日本人の子供たちに較べてずっと小さいように見える。常にああしろ、こうしろ、ああしてはいけない、こうしてはいけない、と言われてっていると、自発性が萎縮してしまうのではないだろうか。愛情を周囲の人間からたっぷりと受けて育った者は、自らの情愛を示すときにも、ためらわずに自然に出来るのではないだろうか。

初登校日は12時半で終了。いや、初日だけでなく、ほとんどの日は12時半に小学校は終了するのである。ただし、イタリアでも女性の社会進出が進み、外で働いている母親が増えたので、テンポ・ピエーノ（英語でいえばフル・タイム）という制度があって、毎日午後四時半まで授業があるかわりに、土曜日が休みのクラスがある。つまり、同じ三年生でも、12時半で帰るクラスと4時半に帰るクラスがあるわけだ。月曜から金曜まで4時半までいたら、そのクラスの方が土曜日を休んでも授業がたくさんあるのではないかと思われるかも知れないが、給食のあとはゆっくりと2時間くらい遊んでいるので、授業はちょっとしか差がないのだ。ただし、後で分かったのだが、12時半で終わるクラスの方が宿題がよくでる。これは考えてみると当たり前で、家に帰る時間が早いことから、宿題をやる時間がある、ということです。僕らの場合は、宿題の多い、少ないは知らないまま、入学の手続きの際にどちらにするか、という選択肢を示され、僕はその時に、イタリア語の分からないうちは、一日中学校に在るのはつらいかもしれないから、12時半で終わるクラス（テンポ・ノルマーレ）にしたほうが良いのではないだろうか、と学校側の人（これは後にわかったが教員とは別に、事務専門の職員が配置されている）に言うと、彼らもそれがいいと思うと言ってくれたので、そう決めたのである。ただし、3年生からは英語が加わるので、週2日は4時半まである。

結果的にみて、宿題の多いクラスに入ったのは、ナツオにとっては良かった。まず、先生は僕に、親が宿題をやることに協力してくれるか、と尋ねたので、僕は出来る限り協力すると約束した。つまり、国語（イタリア語）のみならず、算数にしても、地理、歴史にしても、プリントの宿題が多いのだが、問題文の意味が読み取れなくては、やりようがない。というわけで、宿題を考えて、解くのは子供であるが、僕は一年間、宿題のプリントの解説者として、小学校の教育とじっくり付き合うことになったのである。

さて初日の授業は、夏休みの宿題の答えあわせだった。前述のように、イタリアの夏休みは三ヶ月あるので、宿題も沢山でる。一冊の本が、そっくり宿題として出され、その本の中に各教科の問題が書かれている。その日は算数の答えあわせで、ここで判明したのは、意外？なことに、算数はイタリアのほうが進んでいるという驚くべき事態だった。ナツオは二年の一学期を終えた状態、シエーナの子供たちは、二年次をすっかり修了しているのだから、同じ土俵では較べられないのであるが、日本の算数は海外より進んでいるという少なくとも全面的には正しくない情報を、鵜呑みにしていた僕はあわてた。結局わかったことは、イタリアと日本の算数は、ほぼ同じスピードで進むのだが、学年歴が約半年早い彼らは、同い年であれば、半年進んでいるのだ。つまり、二年の一学期を終えた時点で、掛け算の九九を日本人は知らないわけだが、二年を修了しているイタリア人は、既に、九九と簡単な割算を習っていたのである。

ナツオのように、まったくヨーロッパ圏外からやってきて、英語も出来ない外国人受け入れは、ドUBLE小学校でも初めてだったという。当然ながら、彼をどう受け入れていくかについての具体的なノウハウはなかった。しかし、後に判ったことだが、イタリアの教育界には勉強が遅れている子供やハンディキャップを持った子供に対する「個別指導」（individualizzazione や piano educativo individualizzato と呼ばれる）という考え方がしっかりと根付いていて、それに見合った制度が確立されている。ナツオの場合、イタリア語が不自由であるという特殊なハンディキャップがあるとも

言えるし、言葉のせいで勉強が遅れがちな児童とみなすことも出来たであろう。さて、三人（英語の先生を入れれば四人）のマエストラが考え出した具体的な対処法はというと、国語と算数の時間にナツオは別の教室に行って、マンツーマン、即ち、一対一で習うという方法であった。皆が算数を習っているときに、ナツオは別の教室で国語（イタリア語）を習い、皆が国語（イタリア語）を習っているときに、ナツオは算数を習うという具合。この方法は、彼にイタリア語を習得させることが目的で、算数は特に一対一にする必要があったわけではないのだが、何かの科目とペアにしないと先生の空き時間と調整がつかなかったのだと思う（註16）。

さて、ナツオに授けられた国語というかイタリア語は、どのような授業であったかというところ、まず、椅子や机といった物の絵を描かせて、色を塗り、その名前を憶える、といったやり方であった。先生は、子供向けのリチャード・スカーリーの漫画付き辞書というか図解辞典を持ってきて、一つ一つ単語を教え、それをナツオにも描かせ、絵を描き、色を塗りながら憶えるという作業であったようだ。非常に、まだるっこしいようだが、着実に単語が身につくようだ。まさに身体的感覚を通じて、五感を働かせて、言葉を習得させるというわけだ。この方法は、いかにもイタリア的だと、のちのち思うようになった。

というのも、これに限らず、イタリアの小学校では、絵をよく描く。歴史の授業でエジプトのファラオが出てくると、ツタンカーメンの絵を描き、色を塗ってくるといった宿題が出る。算数でも、文章題は、りんごが5個なら、りんごを5個描かせる（単なる○や四角ではなくて、ちゃんとりんごをりんごの形に描き、色を塗る）。要するに、国語、算数、社会（これは、歴史と地理と社会学習（註17）にわかれている）、理科、すべての教科で、しばしば絵を描き、色を塗り、具体的なイメージを生徒自らに組み立てさせるのである。これは、時間がかかって遠回りのようであるが、たいへんすぐれた方法ではないかと思う。時間をかけて自分で造っていくというプロセスが、脳味噌に刻みこまれるのではないか。僕は、ゆとりの教育という言葉が、授業時間数を減らすということと、同義語になるのではなくて、たとえばこういった活動（知識を公式や文字といったエッセンスの形で注入するのではなく、たとえば絵を描くという生徒自らの作業）に振り向けられればと願うものである。

ただし、各教科で絵をかくているせいか、図工の時間は少ない。そして、図画（disegno）となると、日本の小学校のたいていのように、何をどう描いてもよいのではなくて、きっちりと規範的な描き方をたたきこまれる。これには、最初、驚いた。日本では、僕が子供であった30年以上も前から、絵画は好きなように描けばよいとされていたが、イタリアでは、こういうふうに描けと徹底的に枠をはめられる。その絵はまったく古典的である。その枠は既に小学校以前の段階からはめられるのだ。たとえば、サクラコが通っていた幼稚園では毎日、ぬりえをさせる。まったく、ありきたりの絵である。それに丁寧に色を塗っていく。毎日その繰り返し。小学三年では、前景、中景、後景という概念を教えて、前景は大きく、後景は小さく、うんぬんと教えて、風景を描かせ、まことにオーソドックスな遠近感のある絵を描かせたりする。絵に関して言えば、日本の子供たちの方が、個性的ともいえるし、めちゃくちゃともいえる。イタリアの子供の絵は、どの子供も同じ方法論にもとづいた非常にクラシックな絵で、上手で、型にはまっている。もちろん、その一定の枠のなかで、上手、下手（極端に下手という子供はいない、みなかなり上手い）はあり、ナツオのクラスでは誰もがベネデッタという女の子が上手いと認めていたし、たしかに彼女の絵は、色彩感覚が他の子供にくらべて一層すぐれているように見えた。こういった教え方は、保守的かもしれないが、これも一つの立派な見識につらぬかれたものと僕は考える。このような方法では、誰もが一定のレベルに達し、自分の表現手段として獲得できるからだ。

それを別の角度から言えば、型を軽視しない、ということだ。大人になってしまえば、当然前の、なんということのないパターンも、小学生にとっては、何度も訓練してやっと習得できるのだ、

ということ忘れてはならないだろう。日本でそれで成功しているのは九九である。掛け算の計算は、たしかに、欧米人より平均して日本人のほうが早いし、正確であるように思う。しかし、九九以外にも基本的な型というものはあるのだが、それがあまりに無視されていないだろうか。

さて、時間割全体、カリキュラム全体を眺めてみると、イタリアの小学校と日本の小学校の大きな違いの根本は、イタリアの小学校の方がはるかに知育中心ということである。たとえば、日本の小学校の運動会に相当するものは何もない。だいたい、体育の授業数が大変少ない。一週間に一度あるか、ないかで、しかも、算数の勉強が遅れていたり、あるいは「今日はフェデリーコが悪い子にしているから、体育はなし」といった具合で、その時間は、算数に振り当てられたりする。ナツオは体育が苦手なので、体育の時間が日本に較べて非常に少ないことを歓迎していたのだった。そんなわけで、実際に、体育の授業があっても、日本のように何年生は、何メートル泳げるようにしようとか、とび箱が何段とべるようにとか、鉄棒でさかあがりができるのが目標といったことは一切なかった。ナツオによれば、非常にらくちんであって、みんなで体操のようなことや、リトミックのまねごとのようなものをしておしまい。大体、町のなかの小学校だと校庭やプールもなく、体育館があるだけなのだ。だから、個人的にスイミング・スクールにでも行かなければ、泳げるようにならないのではないだろうか。こうして、子供たちは、スポーツを学校ではろくろく習わない。だから、イタリア人は大人も子供も非常にスポーツ好きであるとは言えないだろう。例外はサッカーで、ちょっとした広場でもあれば、子供たちや若者が自発的にサッカーをやっている姿を目にする。

さらに意外だったのは、音楽の授業も実に回数が少ないことだ。日本では、イタリア人は歌が上手いと思われており、たしかに彼らの声は朗々とよく響く人が多いのはたしかであるのだが、皆が歌がうまいわけではないし、うまい人も、少なくとも、学校教育によるものではないようだ。シエーナの場合をみると、学校とは関係なく、教会の合唱隊や、マドリガーレを歌うグループ、吹奏楽団といった音楽関係の親睦団体は数多くある。だから、趣味としては盛んなのだが、決して学校が中心になっているわけではない。また、個人で、ピアノや歌を習っている子もクラスに数人いた。

前述の通り、図工（というかイタリアでは図画、ディゼーニョ、正式な科目名としては *educazione all'immagine*）の時間も、とても少ない。ただし、他のあらゆる教科で、授業中に絵を描かせるし、絵を描く宿題もでるから、子供たちが絵を描く時間にはことかかない。

先に述べた通り、運動会はないが、学芸会もない。学校行事というのは、実に少ない。授業参観もない。年に二回、先生と親との面談がある。何か疑問や問題があれば、そこで先生と話し合えばよいのだ。

学校行事というよりは、授業の一環としての性格が強いと思うが、*gita scolastica* が何回もあった。*gita scolastica* というのは、遠足と社会科見学をあわせたようなもので、行き先は市内のこともあるし、近郊へバスで行ったこともある。歴史の授業で、紀元前のイタリアを習っている時に、エトルリア人の歴史をかなり詳しく学んだ。シエーナも丘の上の町、エトルリア人がつくった町である。ちょっとした工事で、地下を掘ると、エトルリア人の墓が出てきたりする。エトルリア人の生活を理解するために、二度 *gita scolastica* が実行された。一度は、ドゥオーモ（大聖堂）の斜め前にあり、たいていの観光客は素通りしてしまう、*Museo archeologico nazionale*（国立考古学博物館）に歩いていった。もう一度は郊外にバスで繰り出して、ムーロという場所にいったのだが、ここは、エトルリアの王子の住居が発掘された場所で、そこに博物館も設置されているからだ。僕は、先生方の好意により、特別参加をさせてもらえた。二度目の場合は、バスに乗り切れない先生方の足として我が家の自動車を提供したので、ささやかな貢献ができたと思う。こういった博物館には、先生が同伴しているわけだが、行った先の博物館には学芸員がいて、この人達が、実に丁寧でかつ判りやすく、しかもレベルを落とさずに説明してくれるのに感激した。子供相手だからといって、全く、手は抜かない。むしろ、専門用語を使わずに噛み砕く分、骨がおれるであろう。子供たちも興味をもつ

て聞き、よく質問をする。こうして、子供たちは歴史が好きになっていく。具体的なものや、遺跡に触れて、過去の人々の暮らしを想像する。そしてそれが荒唐無稽な想像ではなくて、史料や遺跡という根拠に基づいたものと教えられる。3年生といえども、イタリアの歴史の教え方は実に学問的である。たとえば、エトルリア人がどこからやってきたかについては、ギリシア古代の歴史家トゥキディデスがアジア起源だと述べているが、それに異を唱える専門家もいる、といった具合に教科書に書かれているのだ。つまり、根拠となる文献、異説、専門家の見解などが簡潔に書かれているわけだ。教科書の中でもこういう史料があるから、こういうことが言えるという実証主義は何度も強調されていて、結論が空から降ってくるような記述には決して陥っていない。これが、ともすれば暗記教育に陥りがちな日本での歴史教育との違いかもしれない。

さて、僕の、イタリア初等教育紹介は、このへんで終わることにして、結論に代えて、イタリアの教育で取り入れるべき長所、日本の教育の改善すべきと思われる点を挙げたい。

1. クラスの人数を減らし、それによって個別指導 (individualizzazione) を可能にすること。日本では現在、一クラス40人を上限としているが、イタリアは25人。イタリアの先生方はそれでも、多いと嘆いていたし、生徒が個性化すれば、たしかに、生徒の側が個別の指導を求めてくるし、学級運営の上からもそれが必要な場面が増えてくるであろう。個性化は決して悪いことではないのだから、それに見合った教育体制を整備すべきだと思う。

2. クラス担任を複数化すること。イタリアでは3～4人の担任がいる。国語(イタリア語)系を教える先生、社会科系を教える先生、理数系を教える先生、それに3年生からは英語(地域によって英語を教える適任者がいない場合には、フランス語ということもあるそうだが)を教える先生。日本では、音楽、家庭科、図工などを専門に教える先生がいることは多いようだが、国語、算数、社会、理科は一人の先生が教えていることが多い。これを人文、社会科学、自然科学の系統別にわけて、その先生が2～3クラス担当すれば(学年がまたがっていてもよい)教員の総人数を大きく変えずとも、実施が可能なことだと思う。このことによるメリットは、教員側の専門性を生かす、得意な分野に集中するということばかりでなく、生徒の側でも、先生との相性があるので、一人の先生に多くの科目を習うより、複数の先生に習うことで、少なくとも相性のあう先生と出会う確率は大きくなるはずだということにもある。

3. 教員の雑用を減らすこと。すなわち、先生方のエネルギーが、子供たちの教育へと充分そそがれうる体制を整えること。イタリアでは、先生は生徒とともに登校し、生徒とともに下校してしまう。職員室、職員会議なし。これは、学校行事が少ないから可能なのかもしれない。日本では、ゆとりの教育というと、やたらと知育が目玉にされて、算数や国語の授業時間が減らされたり、カリキュラム内容がやさしくなる傾向にあるが、本来は、生徒一人一人が本当にわかるように時間をかけるのが、ゆとりの教育ではないだろうか。話をもとに戻すと、日本では先生方は、忙しすぎるように思う。教科の教育に専念できぬ体制になってしまっているのである。雑用が多すぎるから、たとえば、作文の宿題を出して、それを添削してやるといった、イタリアでは日常的に見られることも非常にやりにくくなっていると懸念される。つまり、日本では、学校教育・学校生活に、過剰な役割が期待されているために、オーヴァーヒートに陥っているのではないかと僕は思うのである。課外活動に類することは、もっともっと区・市町村をはじめとする地域のコミュニティーや、家庭が分担すべきであろう。生活指導に類することも同様である。

以上の3点が、早急に日本の特に公立小学校が改善すべき点であると僕は考えるが、如何であろうか。

生

- (1) 1995年時点

← 義 務 教 育 →

年 齢	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	
	幼稚園			小学校			中学校								
	幼稚園の最終年1年、小学校6年、中学3年の計10年を義務教育とする。														



外国語系高校 (liceo linguistico)

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

職業系高校 (istituto tecnico) これには9つのタイプがある。即ち、航空、農業、商業、経営・商業文、航海、栄養学、観光、測量、産業（31分野）である。

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

職業学校 (istituto professionale) 3～5年

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

芸術学校 (istituto d'arte) 3～5年

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

芸術系高校 (liceo artistico) 4～5年

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

音楽学校 (conservatorio di musica) 5～10年

演劇学校 (accademia nazionale d'arte drammatica)

舞踊学校 (accademia di danza)

上の図は、*Dizionario della scuola di base e di orientamento* (a cura di Enzo Fresolone) の図をもとにし、日本の読者の便宜を考え適宜、変更を加えたものである。

註14 Francesco de Sanctis, *La scuola*, Mursia, 1998, p.13.

註15 この学級担任複数制 (モードゥロ modulo と呼ぶ) は、以前から試験的に行われてはいたが1990年の法令で正式に認められた。

モードゥロの最も基本的な形は、3人の担任 (英語を除く) が2クラス (同学年で1年A組と1年B組といった水平的な組み合わせが望ましいが、それが困難な場合には1年A組と2年A組といった垂直的な組み合わせも可能) を受け持つということだ。が、諸般の事情でそれがかなわぬ時には4人の担任で3クラスを受け持つ形も認められている。

註16 この特別な指導は、前期 (半年) の間のみ行われたので、通知表には、前期は国語と算数の欄に「個別指導」(‘una programmazione individualizzata’)が行われたと明記されている。

註17 「社会学習」としたのは studi sociali で、1985年から導入された。中学校では「公民 educazione civica」となる。中学校には1979年に導入された。